來ると信じた。今迄長い間求めて居たのはこれである。自分が人生の神秘に觸れてこそ、永遠の生命に生き人生を生かすことが出來るのである。自己の意志を通ずるにあらざれば、人生無意義なりてふことを、深く體驗した。哲理を要求する理智の方面には、一念三千の大哲學あり、教義内容の嚴正なる批判反省は、正しき信仰の合理性を保證し、絶對者即ち、久遠本佛の抱擁のもとに、魂は安らけく憩ひ、自己の意中に現化して、常寂光を作り出す、あゝこれこそ、人間生活の壯麗なる殿堂ではないか。思へば本佛の懷ろに寢つてゐた自分が、偶像や虚飾の城廓に障へられて、眞のみ佛の心を知らなかつた。そうして、家を飛び出して東西南北を流浪してさ迷ふたが、再び本佛のみ許に歸らねばならなかつた。而し其本佛は最早や、五重の塔や、優秀なる調刻を施した本堂の中にはなかつた。形式の偶像を離れた大自然の中に、自己の胸の奥深くに秘められてあるのだ。憩ふべき魂の鄕土、其は日蓮聖人によつて教へられる永遠無窮の玉座であつた。假相を脱した眞實の樂園が展開されてあつたのだ。—(十一、九、二十一)—

能化と所化

深澤雪童

能化所化は師徒の關係である。教師と生徒、師匠と弟子、皆能所相對である。けれ共今自分は、道俗の能所相對に就いて考へて見たいと思ふ。若し、日蓮聖人に對し、又遠く大聖釋尊に對し奉れば、現在の道俗共に悉く所化である。而も其の所化たるや、壽量品に於て、能化佛陀の久遠成道顯本と共に、我々も久遠已來の所化である事が顯されたのである。

扨て其の道俗相對に就いて考ふるに、能所共に、責任即實踐すべき道がある。先づ能化の責任を云へば、

所化を教化善導するにある。身口意三業を以つて教化する事が出來るも、時期相應の方法は、勿論口業教化である。所謂辯說である。此の口業教化は、貪富の別なく、老若を論ぜず最も普遍的に利益を被らしむる事が出來る。けれ共、人もとより、能あり、不能あり、萬人が萬人辯說に巧みとは云へない。故に强いて辯說を用ひずとも、充分教化する事が出來る。即身業教化である。古から身を以つて或は社會事業に力を致し、或は自身戒律堅固に持つて、衆生教化に盡して菩薩と呼ばれ、活佛の如く崇められた、高僧も澤山ある。更に現今に於ては印刷術の發達を利用して、文筆傳導も容易に出來る。けれ共是等身、口、文筆等の源は何處か意より口に出で、身を動かし、筆に走らすのである。故に吾々能化者は、第一に意を清淨に持たなくてはならない。思ひ內にあれば色外に現る。若し意になくして、言葉に發し、行動に現はれたとしても、其れは極めて力のない教化である。教化と見えても教化の價値はない。若し此樣の者があれば、全く、宗教家としての假面を被る、宗教家と云ふ名義を以つて、己が生計の手段と心得て居る者である。されば能化者は如何なる心を根本として、化導に當るべきか。謹で案ずるに釋迦如來の說法、宗祖大士の弘通、皆衆生救濟と云ふ大慈悲心の現れである。故に吾々能化として立つ時は、宜敷く此の佛陀及び宗祖の御心を心として衆生救濟の任に當るべきである。慈悲を離れて衆生教化は出來ない。然し慈悲には自ら嚴愛の二方面、所謂父格の慈悲、母格の慈悲のある事に注意する必要がある。攝折二門共にの慈悲の教化である。只蓮華の如き清い慈悲心から發して、一雨の能く三草二木を潤すが如く、努力する事が肝要である。

次に所化は能化の教を受けて、佛道修行に勤むべきである。又所化は能化より法施を受くると同時に、財施をなし外護して、是を助くべきである。能化所化は離るべき者でない。車の兩輪の如く、鳥の雙翼の如く相輔けてこそ、佛法も興隆するのである。內ニハ有テ智慧ノ弟子ノ覺リ二佛法ノ深義ヲ外ニハ有テ清淨ノ檀越ヲ初めて佛法も久住する事が出來るのである「今生は實長が身に及ばん程は見つぎ奉るべし。後生をば聖人助け給へ。」と六百五十年の昔波木井公が宗祖に御願ひし契約された樣な、清い信仰さへあつたならば、大聖人は何時でも「靈山へまゐまして艮の廊にて尋ねさせ給へ。必ず徒ち奉るべく候。」と、仰せらるゝであろう。

然るに現今の信徒の中に、斯の如く清い信仰の所有者が何人あるか。多くは金の力を以つて大壇越と稱し自分の淺薄の智識を以て、少しく教義を研究すれば增上慢に陷り、僧侶を批判し、欠點を探し出し、天晴大學者となりすまして居る者が澤山ある。甚たしい者は經文讀誦の音聲、節廻し迄を云々せんとする者さへある。是等の人々は誦經を以つて浪花節と心得、或は先祖の廻向を以つて寺院との交際術と考へて居るのである。

自分は殊に宗祖棲神の法窟たる延山近傍に、此の傾向の甚だしいのを歎かざるを得ない。身延の村民にして、月に一回祖師堂に參拜する者が何人あるか。八十余歳の法主猊下が、四方御親敎の御發錫、及び御歸山を迎迎する者が何人あるか。彼等は或は庭に立つて互に私語しつゝ眺め、間違つて低頭禮拜する者さへ極めて稀ではないか。宗祖大士が、「縱ひ何處にて死に候とも未來際迄も心は身延山に棲むべく候。」と宣ひ、「日蓮が弟子檀那等は此の山を本として參るべし。」と御遺言あらせられたからには、身延を以つて信仰の中心としなくてはならない。身延こそ眞の常寂光の都たるべきである。然らば常寂光土建設に要する最大急務は何か？法貴しと雖も自然には弘まらない。如何にしても完全なる能弘の師が必要である。「人貴キカ故ニ處貴シ」とは此の事である。斯くの如く考へ來た時に、自分は完全なる能化輩出即敎學の勃興を叫ばざるを得ない。

ある人現在の延山を評して

「杉の栽培も結構である。けれ共人物の殖栽は一層大切である。」と

聖日蓮之奮鬪

間宮觀應

渺茫たる海洋峰巒たる峰巒、偉大なる自然を背影として七百年已前東條安房の一角に旃陀羅が子とし孤々